

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：34431

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20295

研究課題名(和文)何%からが「おおぜい」か? : 記述的規範の閾値を特定する

研究課題名(英文)Identifying threshold of descriptive norms

研究代表者

尾崎 拓(Ozaki, Taku)

関西福祉科学大学・心理科学部・講師

研究者番号：60909406

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文):多くの人がやっている行動に「つられて」行動する背景には、記述的規範の影響が想定されている。記述的規範が人間のさまざまな社会的行動に影響を及ぼすことは明らかであったが、その基礎的な性質についてはそれほど明確でなかった。本研究では、新たに開発した心理尺度を用いて、「何%の他者がいる」ことが規範としての影響を生じさせるのか、また記述的規範の影響の受けやすさの個人差を測定することができるのかについて検討した。おおむねそれらの目的は達成され、心理尺度が閾値の推定と個人差の測定に役立つことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの他者がやっている行動に「つられて」しまうという社会的な現象について、その基礎的な性質を明らかにすることができたことに意義がある。本研究で開発した心理尺度は、記述的規範の閾値を明らかにするだけでなく、記述的規範への感受性の個人差を測定するうえでも役に立つ。また、この心理尺度は、記述的規範の影響を受けやすい人、受けにくい人、それぞれへの有効な行動変容のはたらきかけのための技術を開発する基礎的な材料になることが期待される。

研究成果の概要(英文):We follow, conform, and imitate others. Especially what the majority strongly influences our social behaviors. Such social influence has been researched as descriptive norm, and the amount of evidence about its effectiveness has been accumulated. However, the fundamental characteristics of descriptive norms have not been examined. This research investigated 1) the threshold of descriptive norm and 2) individual differences of the sensitivity to descriptive norm. A new psychological measure successfully estimates our threshold and personal sensitiveness to descriptive norm.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会規範

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 社会規範は私たちのさまざまな社会的行動に影響を及ぼす。古典的な社会心理学の実験的研究においても、また近年の行動変容を促すための技術開発においても、社会規範の影響については広く検討がなされてきた。社会規範の代表的な定義では、社会規範は「多数の他者が実際にある行動をとっている」ことにもとづく記述的規範と、「多数の他者がある行動を取るべきだ」という信念をもっている」ことにもとづく命令的規範に区別することができる(とされる(Cialdini et al., 1990)。本研究で取り上げたのはこのうち記述的規範であり、記述的規範が環境配慮行動やリスク対処行動、健康行動などの幅広い分野の行動変容に効果的であることは広く合意されている (Nyborg et al., 2016)。

(2) 記述的規範が行動変容をもたらすことについての広範な証拠がある一方で、記述的規範の基礎的な性質についてはそれほど明らかにされてこなかった。本研究が目じた記述的規範の基礎的な性質はその閾値、影響力の大きさ、影響の受けやすさの個人差の三つである。記述的規範は典型的にはある行動をとっている他者の割合で示されるが、具体的に何割の他者が行動をとっていることが規範としての影響力を発揮することになるのかは明示的にはされてこなかった。また、ある行動をとっている他者の割合が多ければ多いほど規範としての影響力は強くなると想定されるが、その線形性についても明確な証拠は存在しなかった。さらに、記述的規範の影響を受けやすい人と受けにくい人が存在することが想定されるが、この感受性の個人差を推定する方法は開発されてこなかった。

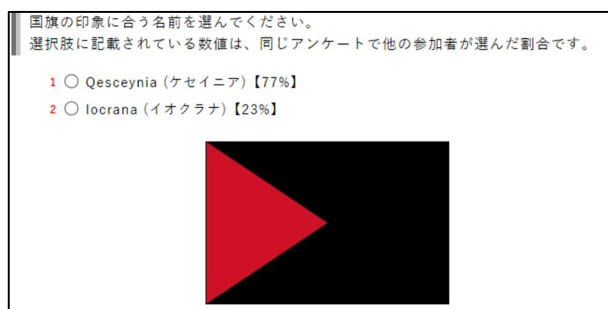
### 2. 研究の目的

(1) 記述的規範の閾値・影響力の大きさ・感受性の個人差をそれぞれ明らかにすることを目的とした。これらを測定・推定するための心理尺度を新たに開発し、その妥当性を検証することにした。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究で記述的規範の基礎的な性質を明らかにするために開発した心理尺度は、「無意味図案への名づけ課題」である。これは、無意味な図案と名前の候補を示し、それぞれの名前の候補について、同一サンプルプールから得られた他者の動向の情報を加えたものである(図1)。参加者は、多数派が選択した名前か、そうでない名前かを選択することになる。

図1 無意味図案への名づけ課題

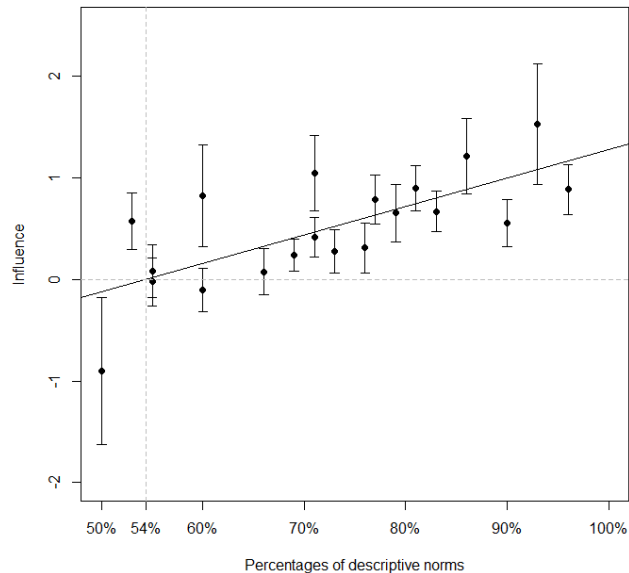


(2) 無意味図案への名づけ課題を用いた調査は、それぞれ200名の一般成人の参加者を対象に、オンラインで二回実施した。なお、ほぼ同一の設定で調査を実施したが、二回目の調査では、図案と多数派の動向の交絡を排除するため、他者の動向については無作為な組み合わせに変更した。また、この課題に加え、個人の同調傾向を測定する既存の心理尺度を用い、本課題との関連性を検討した。

### 4. 研究成果

(1) 二回の調査では、閾値・影響力の大きさ・個人差についていずれもおおむね同じ結果が得られた。得られたデータは一母数の項目反応モデルを用いて分析した。項目反応理論におけるパラメータ $b$ は、提示した他者の動向がもつ規範としての影響の強さであり、これを項目ごとに推定した。第一回の調査で得られた結果を図2に示す。提示した多数派の割合が多いほど影響の強さが強いことがわかり、多数派の割合と影響の強さの相関係数は $r = .71$  ( $p < .001$ )であった。ある選択肢に賛同する人が多いほど、その選択肢に同調させる強い力が働くという結果は常識的なものであるが、本課題が現実場面での社会的影響を再現していることを示すと解釈できる。

図 2 提示した他者の割合と項目の影響の強さの関係



(2) 図 2 から記述的規範の閾値を読み取ることができる。図 2 の回帰直線で影響がゼロになる地点は、多数派の割合が 54%であることがわかった。過半数をやや上回る地点が記述的規範の閾値になるとみなすことができる。ただし、ちょうど 50%の情報を示した場合の影響の強さの推定値は不安定であり、54%を閾値とする強い証拠が得られたとは評価できなかった。

(3) 得られたデータから、記述的規範の感受性（項目反応理論におけるパラメータ）を推定し、これと既存の同調尺度（横田・中西, 2011; Mehrabian & Stefl, 1995）との相関を求めた。これらに統計的に有意な相関関係は見出されなかった ( $r = -.08, p = .29$ )。従来の質問紙を用いた個人特性の推定結果と、本課題で推定した感受性は一致しなかった。この結果は、本課題の尺度としての基準関連妥当性の低さを示すものであり、さらなる検討が必要である。ただし、言語的な内省に頼らない行動ベースでの感受性を測定できるところに本課題の利点があり、社会的望ましさの影響を取り除いた記述的規範への感受性を測定できている可能性もある。

< 引用文献 >

- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58(6), 1015-1026. <https://doi.org/10.1037//0022-3514.58.6.1015>
- Mehrabian, A., & Stefl, C. A. (1995). Basic temperament components of loneliness, shyness, and conformity. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 23, 253-264. <https://doi.org/10.2224/sbp.1995.23.3.253>
- Nyborg, K., Anderies, J. M., Dannenberg, A., Lindahl, T., Schill, C., Schlüter, M., Adger, W. N., Arrow, K. J., Barrett, S., Carpenter, S., III, F. S. C., Crépin, A.-S., Daily, G., Ehrlich, P., Folke, C., Jager, W., Kautsky, N., Levin, S. A., Madsen, O. J., ... Zeeuw, A. de. (2016). Social norms as solutions. *Science*, 354(6308), 42-43. <https://doi.org/10.1126/science.aaf8317>
- 横田晋大, & 中西大輔. (2011). 同調志向尺度の作成 -規範的影響と情報的影響-. 広島修大論集, 51(2), 23-36.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------